

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業
難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究
分担研究報告書

小児劇症肝炎に関する研究

研究協力者 笠原 群生 国立成育医療研究センター 臓器移植センター長

研究要旨：小児劇症肝炎は原因が不明であることが多く、病勢の進行も早く脳症の判断が困難であり、診断に苦慮することが多い。そのため、予後は不良であり、診断精度の向上や適切な管理体制の構築が急務である。しかし、現状ではまとまった症例報告が少なく、小児症例全国調査が必要である。現在小児症例全国調査結果の集計・解析を行っているが、その前段階として、今回、本邦において症例数の最も多い機関の一つである国立成育医療研究センター単施設での結果を考察した。

A. 研究目的

単一施設である国立成育医療研究センターでの小児劇症肝炎症例の検討を行い、本邦における小児劇症肝炎の現状と課題を浮き彫りにすることが目的である。

B. 研究方法

本研究は既存の情報を用いる後ろ向き観察研究であり、プライバシーの保護には十分配慮するため患者識別対応表を管理し、個人情報保護に努める。2005年から2021年1月までの132例を対象とした。

C. 研究結果

132例中92例(88%)が劇症肝炎の原因は不明であった。28例が内科的治療で改善し肝移植を回避できたのに対し、104例は肝移植または死亡症例であった。内科的改善症例は劇症肝炎の原因不明症例が少なかった

(43%)のに対し、肝移植または死亡症例は原因不明症例が有意に多かった(75%)。14例が内科的治療不反応にもかかわらず肝移植が施行不可能で死亡していた。移植不可能な主な理由は敗血症を含めた感染症と著明

な脳浮腫であった。全体の患者生存率は78%であり、肝移植後の患者生存率は、1年で87%、5年で82%であった。

D. 考察

肝移植後の成績に関しては、全国統計の1年、5年患者生存率が76%、71%であるのに比して良好であったと言える。しかし、依然課題として小児劇症肝炎では原因不明な症例が多く、原因解明が移植回避につながる可能性が示唆された。また、原因不明症例においても肝移植施行を施行することで救命できる可能性が高く、重度の神経障害や感染症に陥る前に移植施設に紹介するシステムの構築の必要性も示唆された。

E. 結論

単一施設である国立成育医療研究センターでの小児劇症肝炎に対する成績は良好であった。今後の課題としては、専門施設への紹介のタイミングの検討、原因精査も含めた急性管理の構築である。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし